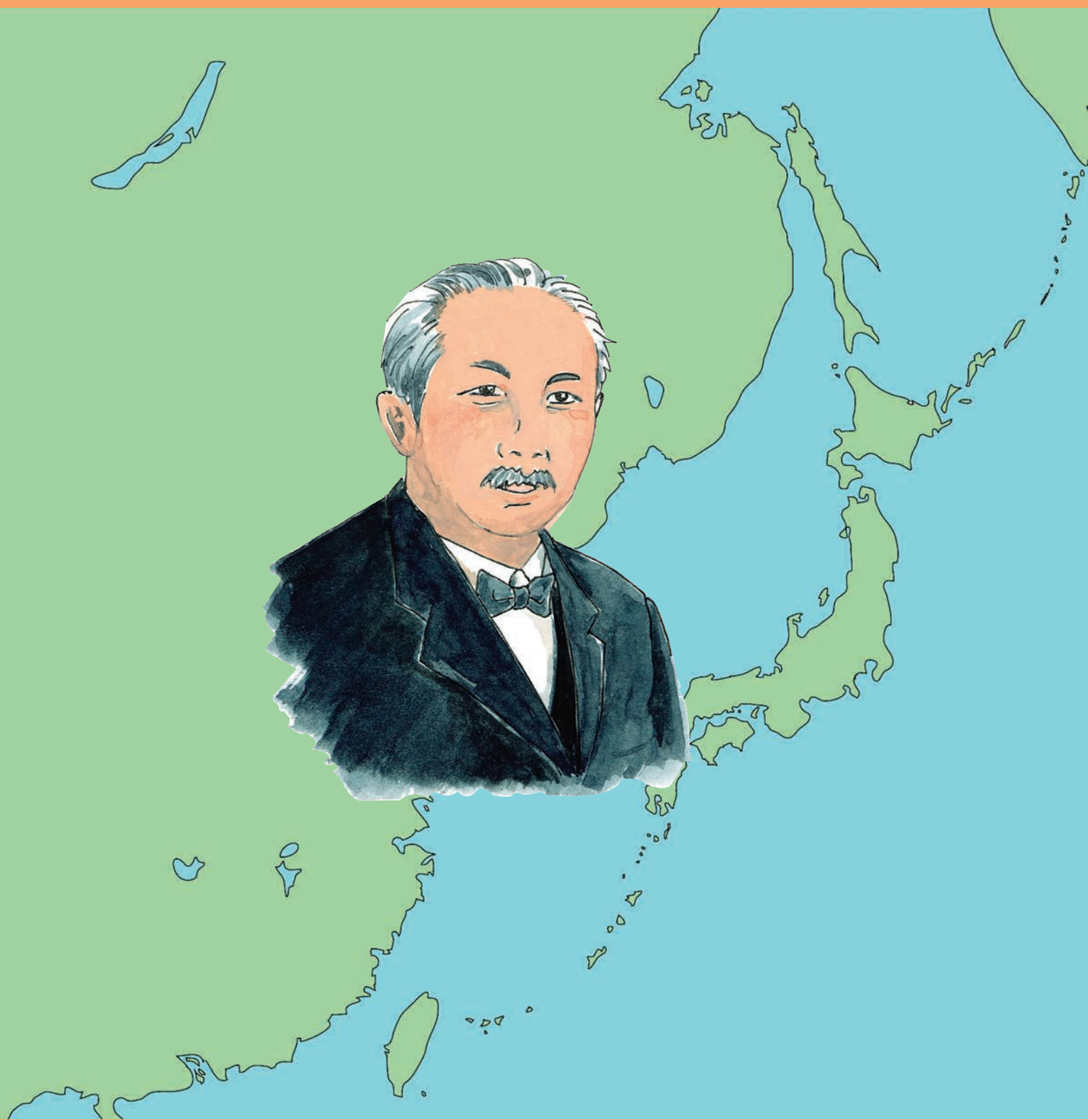


新
編

みんなで学ぼう！ 鳥居龍蔵



徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

はじめに

鳥居龍蔵は、徳島出身の人類学・民族学・考古学の研究者です。徳島をはじめとする日本の各地、さらには東アジアの広い範囲を自ら訪ね、さまざまな民族の体格や言語、技術、昔話、生活文化などを幅広く調査しました。また、遺跡の発掘調査もさかんに行ないました。そして、調査の成果をたくさんの本や論文にまとめました。

こうした研究を通して龍蔵が目指したのは、日本人と日本文化の起源を明らかにすることでした。東アジア各地を調査しながら、たえず日本と比較し、また、日本各地の調査でもアジアの中での位置づけをしていきました。そうした研究の姿勢や行動力は、簡単にはまねることのできないすぐれたものです。龍蔵は、私たちの郷土徳島が生んだ偉大な先人といっぴよいでしょう。

この冊子は、小学校高学年以上の多くの方に読んでもらうために、Q&A形式でやさしくまとめた龍蔵の伝記です。みんなで学ぶためのテキストとして活用してほしいと願っています。

目次

はじめに	1
1 鳥居龍蔵のふるさと・徳島	3
2 苦勞の末につかんだ博士号	6
3 アジアへの旅 — 探求・冒険・挑戦 —	8
4 家族が支えた研究	14
鳥居龍蔵関係略年表	17

おことわり

この冊子には、明治時代から現代までの国内外の学校名や地名などが出てきます。理解しやすいように、原則として現在の名称を用いました。また、海外の地名は、日本語読みを基本としました。

1 鳥居龍蔵のふるさと・徳島

鳥居龍蔵は徳島で生まれ育ちました。子どものころの様子やゆかりの地をみていきましょう。

生い立ち

どこで生まれたの？

龍蔵は、1870年(明治3)4月4日、徳島市街の中心地にかかると新町橋しんまちばしの近く、今の徳島市東船場町1丁目ひがしせん ぼちようで生まれました。

龍蔵の家は江戸時代から続いたばこ問屋で、たくさんの人が働いていたそうです。



龍蔵が生まれたころの徳島市街の絵図
●は龍蔵の家の位置です。徳島城下町絵図より。



明治10年代(1877~1886)の新町橋周辺
橋の北側からみた図です。南海徳島豪商銘工魁なんかいとくしまごうしょうめいこう せいのより。

どんな子どもだったの？

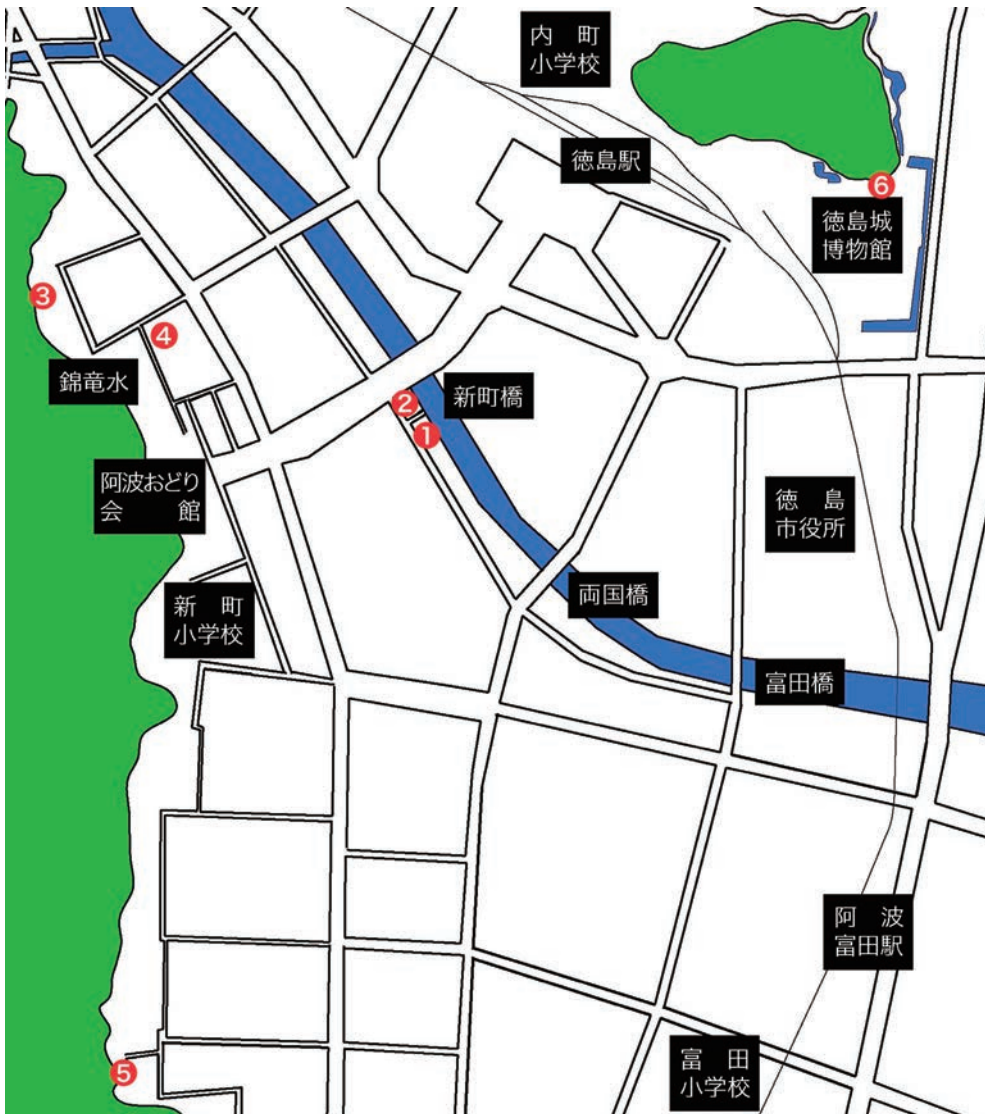
龍蔵は6才になった1876年(明治9), 観善かんぜん小学校(今の新町小学校)に入学しました。しかし、学校になじめず、いつも家に逃げ帰っていました。

そんな龍蔵でしたが、学校の教科書に「世界の人類は5人種ある」と書かれていたことが、印象に残ったそうです。後にアジア各地を駆けめぐる学者となる原点がここにあったのでしょうか。

龍蔵はやがて、学校へ行かずに独学の道を歩むようになります。一人で本を買ってきて読んだり、今でいう中学校・高等学校の先生に教わったりして、歴史や文学、英語、ドイツ語、数学などの勉強をしました。



11才のときの龍蔵



- ①鳥居龍蔵の生家跡
- ②記念碑
- ③滝薬師の石柱
- ④浄智寺(観善小学校跡)
- ⑤光仙寺墓地(鳥居家の墓)
- ⑥城山貝塚と記念碑

★コラム 城山貝塚★

龍蔵が徳島に残したもっとも大きな成果は、縄文時代の遺跡である城山貝塚(貝塚とは、人が捨てた貝殻が層になって積もった遺跡のこと。貝殻のほかに鳥獣や魚の骨、土器・石器・骨角器などを含ます)の調査です。

この貝塚は、徳島駅北側にある城山のふもと、徳島中央公園の中にあります。1922年(大正11)4月、龍蔵は、城山のふもとから貝殻が出ることを聞きつけて発掘し、大きな岩の下で貝殻や土器の破片を発見しました。そして、周辺を調査し、洞窟や岩陰の中から、あらたに2か所の貝塚を発見しました。発見順に、1号・2号・3号貝塚と名づけました。さらに、4号遺跡(貝塚ではないのでこう呼びます)も発見しました。貝塚からは、ハマグリ、アサリ、カキ、ハイガイなど、海の貝が見つかりました。また、2号貝塚からは、3体の人骨が出土し、大昔の人々の生活の跡として関心を集めました。



城山貝塚(3号貝塚)を調査する龍蔵



烏居龍蔵記念碑(地図②)
道路をはさんだ東側が生家跡(地図①)です。



滝薬師の石柱(地図③)
龍蔵の祖父が寄進したものです。



浄智寺(地図④)
龍蔵が子どものころ、今の浄智寺敷地は還国寺^{げんこくじ}の境内で、^{けいだい}そこに龍蔵が通った観善小学校がありました。



光仙寺にある烏居家の墓(地図⑤)
背の高い墓碑は、龍蔵の母親のものです。



城山貝塚(3号貝塚)と記念碑(地図⑥)

2 苦勞の末につかんだ博士号

独学を続けた龍蔵が人類学という学問と出会い、東京へ出て博士号を得るまでの歩みをみていきましょう。

人類学との出会い

人類学って何なの？

人類学とは狭い意味では、人間の体格や体質を調べる学問をいいます。しかし、龍蔵の時代には、言語や技術、昔話などの文化を調べること(民族学・文化人類学)、遺跡の発掘調査によって社会や文化などを明らかにすること(考古学)も含んでいました。そうした背景があったため、龍蔵の研究は、とても幅広いものでした。

どうして人類学を勉強するようになったの？

1886年(明治19)、龍蔵は16才のとき、東京で人類学会ができたことを知り、入会しました。そして、学会のリーダーだった坪井正五郎つばいしゅうごろうという若い学者と手紙をやり取りして指導して

もらうようになりました。

1888年(明治21)には、坪井が龍蔵の家を訪れ、東京で学ぶよう誘ったそうです。

いっしょに勉強する仲間はいなかったの？

坪井が徳島に来たときに、徳島市寺町にあるお寺で講演会が開かれました。それをきっかけとして龍蔵は、徳島で人類学を勉強しようという人たちを誘って研究グループをつくりました。一人で勉強してきた龍蔵には、仲間との活動は初めての経験でしたから、さぞかし楽しかったことでしょう。

東京大学へ

東京へ引っ越したの？

1890年(明治23)、龍蔵は一人で東京へ行きました。すぐに坪井を訪ねましたが、ヨーロッパ留学中のため、会えませんでした。そこで龍蔵は、徳島出身の先輩を頼り、東京国立博物館などで勉強しました。

坪井に再会したのは1892年(明治25)で、以後、東京大学の人類学研究室に通うようになりました。この年には、家族も東京に移り住みました。



1897年(明治30)、眉山のふもと(寺町)の錦竜水きんりょうすいの前で撮影された写真

右はしが坪井、そのとなりが龍蔵です。

大学ではどんなことをしたの？

1893年(明治26), 龍蔵は東京大学人類学研究室で標本整理の仕事に就き, 正式に研究室のメンバーになりました。坪井の指導を受け, 貝塚や古墳の調査に取り組んだほか, 栃木県・埼玉県・長野県・兵庫県・徳島県を旅行し, 土地の風習や昔話を調べました。

龍蔵はその後, アジア各地の調査や研究で有名になり, 東京大学の先生になりました。そうなる前から, 大学内の授業や語学の夜間学校



書斎で仕事中の龍蔵



新婚当時の龍蔵夫妻

に通い, 年下の学生とともに勉強を続けたのでした。

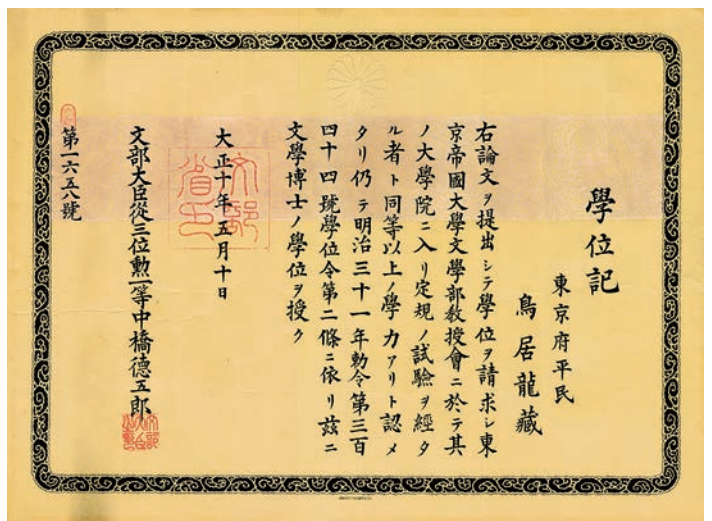
博士号はいつもらったの？

1921年(大正10), 龍蔵は大陸での調査をもとにまとめた「満蒙の有史以前」という研究により, 文学博士の学位を得ました。「満蒙」とは, 今の中国の東北部と内モンゴル, そしてモンゴル国を含む地域のことです。独学でスタートし, 苦勞しながら進めた龍蔵の研究が, 高く評価されたのです。

ここに至るまでには, 坪井の指導はもちろんのこと, 東京に移り住んだ家族, 1901年(明治34)に結婚した妻きみ子の支えがありました。



博士論文の下書き



文学博士の学位記

3 アジアへの旅 — 探求・冒険・挑戦 —

龍蔵^{しょうがい}は生涯を通じて、アジアの各地を訪ね、さまざまな民族の様子を調べました。その旅がどのように行われたのかみていきましょう。

龍蔵の足跡



このページの地図は、龍蔵が調査した地域を大まかに示しています(うすいブルーで色を着けたところ)。台湾、中国(西南部，東北部，内モン

ゴル)，朝鮮半島，シベリア，サハリン，千島列島などと，東アジアに広がっています。龍蔵の行動力がよく分かりますね。

初めての海外調査

龍蔵が初めて海外に行ったのはいつなの？

1895年(明治28), 当時25才だった龍蔵は、東京人類学会から遼東半島の調査に派遣されました。これが初めての海外調査でした。また、日本の人類学者による最初のアジア大陸調査でもありました。

どんなことを調べたの？

龍蔵は5か月間、歩いて調査しました。各地で石器を採集したり、ドルメン(大きな天井石と、それを支える数個の石でつくられた墓)を発見したりしました。当時知られていなかった、中国東北部における石器時代の遺跡を初めて確認したのです。



遼東半島の析木城で龍蔵が発見したドルメン

野外調査にカメラを導入した台湾調査

どうして台湾へ行ったの？

日清戦争(1894~1895年)の結果、日本が台湾を領土としたため、そこにくらす人々のことをくわしく調査することが必要になったためです。1896年(明治29), 龍蔵は東京大学から台湾へ派遣されました。これを最初として、1911年(明治44)までの間、5回にわたり調査を行ないました。

カメラはめずらしいものだったの？

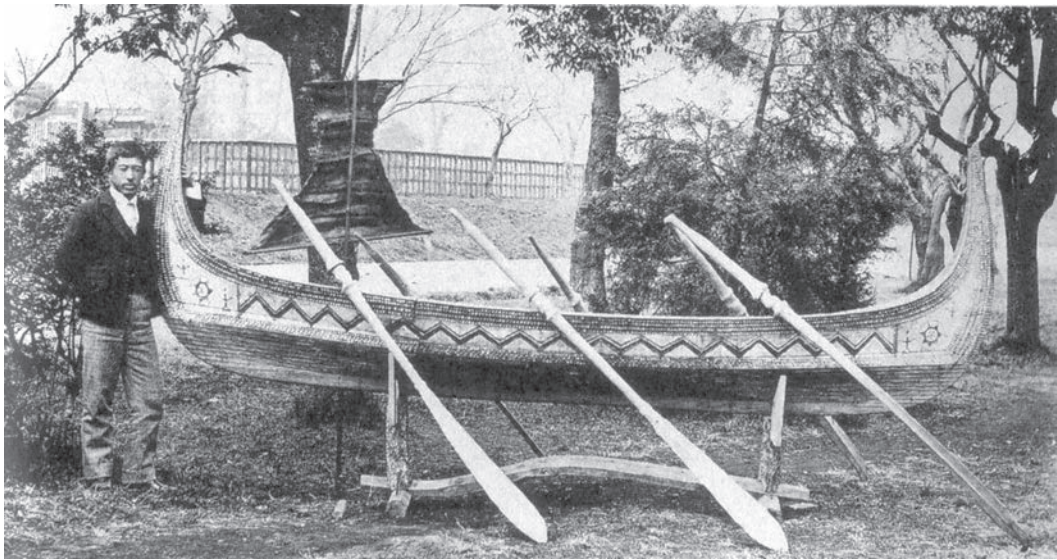
そのころのカメラは、まだ誰もが手軽に使っているものではありませんでした。そんな中、龍蔵は台湾の調査で、日本人による野外調査としては初めてカメラを使用しました。写真による正確な記録を残すことができるようになったのです。

どんなことを調べたの？

台湾に古くからくらすしている原住民族が、どこから台湾に移り住んできたのかということを知ろうとして、体格や言語、技術、風俗などを調べました。また、1897年(明治30)に調査した蘭嶼(紅頭嶼)という島でのヤミ族の調査は、貴重な業績です。



原住民族の人たちと話をしながらメモをとる龍蔵



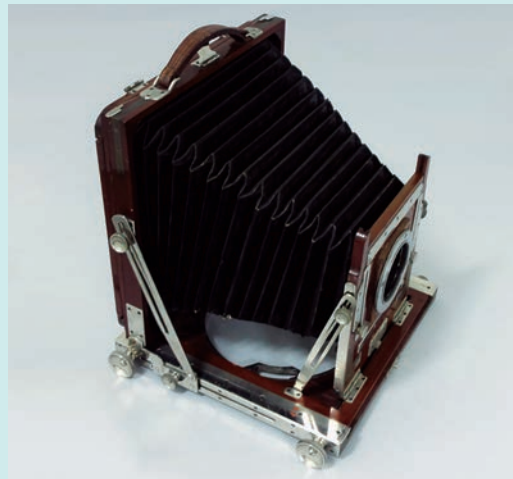
ヤミ族の船と龍蔵

★コラム 龍蔵の先進性とカメラ・蓄音機★

龍蔵の調査は、最新の機器の導入が特徴的で、日本人の野外調査では初使用となったカメラと蠟管蓄音機ろうかんちくおんきが有名です。龍蔵の先進性を示すものといえるでしょう。

龍蔵が使ったカメラは、フィルムにあたるガラス乾板かんばん(ガラス板に薬剤をぬりつけたもの。ハガキくらいの大きさで、1枚あたりおよそ100g)に写すものでした。カメラの重さは3～4kgもありました。今の手軽なデジタルカメラとはずいぶん違います。龍蔵が生涯にわたる調査で撮影した写真が東京大学や当館などに残っており、貴重な記録となっています。

蠟管蓄音機は、1904年(明治37)の沖縄調査で用いられました。蓄音機はエジソンが発明したことで有名ですね。龍蔵が使ったのは、ろうをぬった管に録音する機械でした。今なら小型のICレコーダーを使うでしょうか。龍蔵は、八重山やえやまの民謡を録音したそうですが、現在、音声記録は残っていません。



カメラ

これは、龍蔵が使ったものではありませんが、当時はこのような形のカメラを使用しました。先端にレンズを取り付け、三脚に固定して撮影します。



沖縄で撮影された写真

どうして中国西南部へ行ったの？

龍蔵は、1902年(明治35)、中国西南部の調査を行ないました。台湾で調べた原住民族と中国南西部の苗(ミャオ)族が関連しているのではないかと考えたからです。

なお、中国西南部といっているのは、中国最大の川である長江の源流部にある地域です。険しい山々が連なる山岳地帯がほとんどです。また、たくさんの少数民族が住んでいるところです。

たいへんだったんじゃないの？

龍蔵が調査した地域は山岳地帯だったため、交通が不便でたいへんでした。その上、治安の悪さに苦労しました。身の安全のために、中国の役人に^{へんそう}変装したことさえありました。また、撮影に使うガラス乾板が500~600枚(50~60kg)あったので、重い荷物も運ばなくてはいけませんでした。



変装した龍蔵(馬に乗っている人物)

どんなことを調べたの？

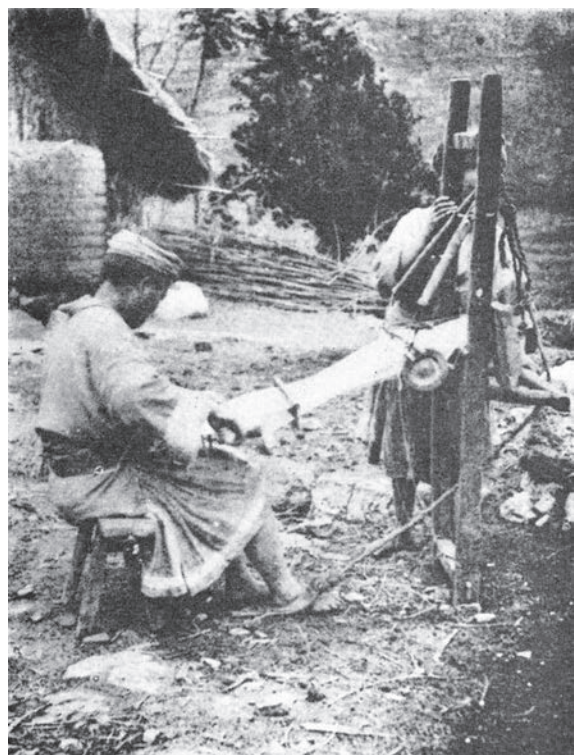
苗族をはじめとする、いろいろな民族の身体計測や言語、神話、衣服、食事、住居などの調査をしました。その際、中国でまとめられていた少数民族の記録なども活用しており、そのころ行なわれた中国西南部の調査の中でも、すぐれたものでした。

また龍蔵は、この地域の文化と日本文化の比較も行ないました。そうした面でも、特徴的な研究でした。



苗族を記録した写真

(左)笙という楽器を持っている人物 (右)機織りの様子



今の北海道に住んでいるアイヌ民族と千島アイヌは違うの？

20世紀以前、アイヌ民族はそれぞれに特徴をもつ3つの集団に分かれていました。北海道とエトロフ島以南の千島列島^{ちしま}に住む北海道アイヌ、サハリン南部のサハリンアイヌ、千島列島北部の千島アイヌです。アイヌ民族という意味では同じですが、言語や文化に違いがありました。



警備艦「武蔵」でおどる千島アイヌの女性たち

千島アイヌの人たちはどれくらいいるの？

龍蔵は1899年(明治32)、東京大学から派遣されて千島アイヌの調査をしました。このころ、千島列島全体が日本の領土でした。千島アイヌは、政府によってシコタン島に集められていましたが、すでに60名余りしかいませんでした。今では、千島アイヌの血を引くという人はほとんどいなくなっています。



千島アイヌの仕事風景
革のくつやかごなどを作っています。



木製の帯留^{おびどめ}(帯がほどけないようにするための道具)



木製の人形

どんなことを調べたの？

千島列島最北端のシムシュ島まで行って遺跡を調査し、アイヌが日本の先住民族ではないかと注目しました。また、シコタン島で老人から神話や昔話、生活習慣などの聞き取りをしたり、生活道具などを作ってもらったりしました。そうやって残された調査成果は、千島アイヌの貴重な記録です。

多くの遺跡を発見した朝鮮半島の調査

どうして朝鮮半島へ行ったの？

1910年(明治43)、日本は朝鮮半島^{ちようせんはんとう}を領土にし、支配のために朝鮮総督府^{そうとくふ}を置きました。龍蔵は、この総督府からの依頼を受けて調査をすることになりました。1910年に予備調査を行ない、翌年からの本調査は、1916年(大正5)までの毎年(計6回)、行ないました。龍蔵が調査した範囲は、朝鮮半島全域に広がっていました。

龍蔵の朝鮮半島への関心は深く、総督府の仕事^やを辞めた後にも、2回調査をしました。



エトピリカという海鳥の皮で作られた服
1着仕立てるのに、およそ50~60羽を必要
としたそうです。

どんなことを調べたの？

主に石器時代の遺跡を調査し、金海貝塚^{キムヘ}の発掘、各地でのドルメンの発見などの成果がありました。

そのほか、朝鮮半島各地の風習や信仰などの調査を行ない、写真をたくさん残しています。当時の生活文化の記録として貴重なものです。



金海貝塚発掘調査の様子

龍蔵が撮影した朝鮮半島の生活

(上)陶器市 (下)相撲

4 家族が支えた研究

龍蔵の調査や研究には、妻のきみ子をはじめ、家族とともに取り組むという特色がありました。東京大学を退職した後、それが本格化しました。そうした家族ぐるみの研究の足跡をたどってみましょう。

初めての家族での調査

初めて家族で調査したのはいつなの？

1906年(明治39)、きみ子が内モンゴルにあったカラチン王府から教師として招かれました。龍蔵もその後を追ってカラチンで教師となりました。一時帰国することがあるものの、夫妻は1908年(明治41)の終わりまで、長い調査の旅を続けました。これが初めての家族での調査でした。

どんなことを調べたの？

文化や風習をきみ子が、遺跡や遺物を龍蔵が、それぞれ分担して調べました。龍蔵にとっては、後にライフワークとなった遼りょう きつたん(契丹族が中国の内モンゴルを中心に建てた王朝。916～1125年)の遺跡や遺物の研究のスタートでもありました。



内モンゴルの慶州城けいしゅうじょうにある白塔はくとうの前に立つ龍蔵ときみ子

鳥居人類学研究所って何なの？

1924年(大正13), 龍蔵は東京大学の先生の仕事を辞めました。そして, 自宅に鳥居人類学研究所をつかって, 「町の学者」として家族ぐるみでの研究を始めました。

家族での調査ではどんな様子だったの？

龍蔵は, 中国の東北部や内モンゴル方面にたびたび調査に出かけました。これらの旅行では, たいてい家族が同行しました。きみ子がマネージャー役を務め, 娘がスケッチを, 息子が撮影をそれぞれ担当するというように, 家族が

龍蔵の研究を支えたのです。

しかし, それを苦にする者はおらず, 一家はいつも楽しく, 学問の話をしていました。学問への情熱で結ばれていたといえます。

どんなことを調べたの？

1930年(昭和5)に行なった遼の慶陵^{けいりやう}(皇帝の墓)の調査は, 龍蔵の生涯を通じて, もっとも規模の大きな発掘でした。これをはじめとして, 遼の歴史・文化について研究を進め, 数多くの著書を出版しました。また, きみ子の研究も, 高く評価されました。



調査中のテント生活



りゅうめんものきまるがわら
龍面文軒丸瓦

遼の遺跡調査で発掘されたものです。



慶陵の調査風景

(左)壁面を模写する娘の緑子
(右)陵の内部を調べる龍蔵

日本国内での活動

日本のことは調べなかったの？

もちろん、日本のことも調べています。東京大学にいたころにも調査していますし、辞めた後には、いろいろなところから招かれて地方の歴史研究や人材の育成に協力しました。

どんなことをしたの？

龍蔵がとくに力を入れたのは、自分が住んでいた東京の武蔵野^{むさしの}地域の歴史研究団体「武蔵野会」の発足・運営、長野県や宮崎県の歴史研究でした。

また、ふるさとである徳島の後輩たちにも力を貸しました。その例として、『川内村史』（川内村は、今の徳島市川内町）の監修があります。



長野県諏訪の調査のときの写真

戦中・戦後の龍蔵と家族

日本と中国との戦争が激しくなっていくと思うけれど、内モンゴルなどの調査は続けたの？

1931年(昭和6)からの満州^{まんしゅう}事変に続き、1937年(昭和12)には、盧溝橋^{ろこうきょう}事件をきっかけとして日中戦争が始まりました。その中でも、龍蔵たちは調査を続けました。1939年(昭和14)には、中国の北京^{ペキン}にあったハーバード・燕京^{えん}研究所から招かれ、一家で北京に移りました。中国各地を訪ねて研究を進めることができたようです。

日本には帰らなかったの？

1941年(昭和16)、日本とアメリカやイギリスなどとの間で太平洋戦争が始まり、アメリカ系のハーバード・燕京研究所は閉じられました。龍蔵一家は苦しい生活を強いられましたが、子どもたちに仕事が見つかり、家計を支えてもらいながら、北京に留まりました。

戦争が終わってからはどうしたの？

1945年(昭和20)、戦争が終わると、ハーバード・燕京研究所が再開されました。中国に対して深い理解をもっていた龍蔵は、再び迎えられる研究に励むことができました。

日本に帰ったのは、1951年(昭和26)でした。遼の文化の研究を完成させたかったからだそうです。

しかし、帰国後の生活は苦しく、多くの人の援助を受けました。帰国から2年後の1953年(昭和28)1月14日、龍蔵は東京で、家族にみとられながら82才の生涯を閉じました。



東京の多磨^{たまれいん}霊園に建てられた記念碑

鳥居龍蔵関係略年表

※は歴史事項

- | | | |
|-------------|---------------------------------------|-------------|
| 1870 (明治 3) | 今の徳島市東船場町で誕生 (4月4日) | |
| 1876 (明治 9) | 観善小学校 (今の新町小学校) に入学 | |
| 1886 (明治19) | 東京人類学会に入会 | |
| 1888 (明治21) | 坪井正五郎が鳥居家を訪問 | |
| 1890 (明治23) | 東京に出て勉強 | |
| 1892 (明治25) | 一家をあげて東京に移住 | |
| 1893 (明治26) | 東京大学人類学研究室の標本整理係となる | |
| 1895 (明治28) | 初めての海外調査 (中国遼東半島) | ※日清講和条約 |
| 1896 (明治29) | 第1回台湾調査 (カメラ初使用)。帰途に沖縄調査 | |
| 1898 (明治31) | 東京大学助手となる | |
| 1899 (明治32) | 千島列島の調査 | |
| 1901 (明治34) | 市原キミ (つねに「きみ子」と名乗った) と結婚
徳島県木頭村の調査 | |
| 1902 (明治35) | 中国西南部の調査 (~1903年3月) | |
| 1904 (明治37) | 沖縄の調査 (蝋管蓄音機初使用) | ※日露戦争 |
| 1905 (明治38) | 東京大学講師となる | ※日露講和条約 |
| 1906 (明治39) | きみ子・龍蔵が内モンゴルで教師となる | |
| 1910 (明治43) | 朝鮮半島の予備調査 | ※韓国併合 |
| 1920 (大正 9) | フランス学士院からパルム・アカデミックを贈られる | |
| 1921 (大正10) | 文学博士の学位を授与される | |
| 1922 (大正11) | 東京大学助教授となる。徳島市城山貝塚の調査 | |
| 1924 (大正13) | 東京大学を辞職。鳥居人類学研究所を設立 | |
| 1939 (昭和14) | 中国北京のハーバード・燕京研究所から招かれる | |
| 1941 (昭和16) | ハーバード・燕京研究所閉鎖 | ※太平洋戦争 |
| 1945 (昭和20) | ハーバード・燕京研究所再開とともに復帰 | ※日本, 連合国に降伏 |
| 1951 (昭和26) | ハーバード・燕京研究所を退職し, 帰国 | |
| 1953 (昭和28) | 東京において死去。82才 (1月14日) | |
| 1959 (昭和34) | きみ子, 東京において死去。79才 (8月19日) | |



協力者（敬称略）

諏訪市博物館

東京大学総合研究博物館

東京大学大学院理学系研究科人類科学大講座

天羽 利夫

氏家 敏之

丸尾 貞代

宮武 健仁

平成 27 年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業 II

新 編 みんなで学ぼう！ 鳥居 龍蔵

2016年 1 月31日発行

編集 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<http://www.torii-museum.tokushima-ec.ed.jp>

発行 鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会

（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館内）

印刷・製本 株式会社教育出版センター



平成 27 年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業 II